

石狩川

風景への旅

石狩浜②

空襲で消えた大ホテル

土地の名は、その綴音（なづか）の中に
あらかじめ無数の神話や挿話を
抱いている。だからこそどんな
地名も、単にもののように扱う
ことはできないのだ。風景もそ
うだろう。いま見えている世界
のリアリティーは、過去に起き
たことや生きた者たちとの関わ
りの上でしか成り立たない。

石狩浜を歩くと、見えない風
景のほつれを意識することがあ
る。糸口は、建築家田上義也が
設計して数奇な運命の果てに消
え去った、石狩海浜ホテルだ。

場所は、現在閉鎖中の石狩温
泉ホテルのさらに海側の一角。
残された写真で見ると、開口部
を大胆に連ねたオーシャンビュ
ーの3階建てで、まるで戦前の
ヨーロッパ映画にでも出てきそ
うなたたずまいだ。45層もの間
口をもつ横長の建物と、海に面
した全面のデッキやセットパツ
クした2階、客室の円窓や塔屋
のデザインからは、田上がホテ
ルを上質な客船に見立てたこと
がわかる。1階には天窓をあけ
た大浴場もあった。

1932（昭和7）年にまち
の有志によって計画されたこの
砂丘の大ホテルが、資金難と戦
いながらようやく竣工したの

は、その5年後。しかし内装の
仕上げまで予算がまわらず、工
事はストップ。42（昭和17）年
にはそのまま道庁に売却されて
しまう。やがて、戦時下で青少
年を鍛える健民修練所となって
しまった。

そして45（昭和20）年7月15
日。手稲の製油所や札幌北部の
飛行場などを襲ったアメリカ空
母群の艦載機は石狩にも襲来
し、ホテルはあっけなく焼け落
ちた。結局ただひと組のリゾー
ト客を泊めることもなく、ホテ
ルは生涯を終えたのだ。台風一
過の朝など年に数回、砂に埋も
れた建物の基礎がいまも垣間見
えるというが、残念ながら僕は
見たことがない。

音楽が一瞬で全体を現すこと
が決していないように、風景もま
た、時間という舞台の上ではじ
めて本来の命を保つことができ
る。時制のない土地の姿を切り
取っただけの絵はがきに、異郷
の人びとは気まぐれに自分を映
し込み、土地の人は苦笑を浮か
べるだろう。求められているの
は、土地の複雑なエコーに、そ
っと耳をすませることだ。

（文・谷口雅春）
（写真・露口啓二）



石狩浜より小樽方面を望む。今は砂丘と草原以外何もない

2012.7.4